

(^_^)v 趣味に生きる (第31回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

艸窯(そうがま)に魅せられて

池田 弘典

(佐賀大学医学部附属病院検査部)

◆はじめに

2012年9月、地元佐賀市で開催している臨床化学の勉強会での講演会に東京から著名なS先生をお招きし、翌日お礼の気持ちを込めて有田や唐津の窯元をご案内しました。佐賀県有田町は日本で初めて磁器を作って400年の歴史を持つ焼き物の街です。私はS先生を柿右衛門窯や今右衛門窯、宮内庁御用遠深川製磁参考館などの有名な窯元にご案内し、「柿右衛門の濁手の作品には裏に銘が入っていないんですよ。」と想いをこめて解説しました。S先生にも大変喜んでいただき、その際のご縁でこの欄への執筆の推薦を受けました。私は、観たり買い求めるのが好きな唯の焼き物ファンで、陶芸家ではありません。これでも趣味といえるのだろうかと思いつつもお受けした次第です。

私が焼き物に興味を持ったのは、父の影響です。幼い頃、窯元で見た寡黙な職人とその作陶に打ち込む姿に敬意を払っていた父を憶えています。最初器の良し悪しは分かりませんでしたが、だんだん見る目も養われ、大人になって陶器や磁器などの焼き物が好きになりました。

その私が磁器の町の有田で今最も注目しているのが、艸窯(そうがま)の作品です。一見、普通の器に描かれた草花模様に見えますが、よく見ると写真1のように器の表と裏の同じ位置に同じ模様を示しています。焼き物に多少の知識の有った私ですが、この不思議な表裏一体の模様を最初に見たときはとても驚きました。皆さんも、どうしたらこのような模様ができるのか想像してみてください。

◆磁器の歴史

焼き物には、陶器と磁器があります。中世では陶器は国内で作り、磁器は輸入していました。発端は豊臣秀吉が起こした文禄慶長の役(1592年~)です。九州山口の各藩(鍋島、唐津、平戸、福岡、細川、島津、毛利藩)は、労働力と技術力の導入を目的として李朝の陶工を大量に連行してきました。この戦争は別名「焼き物戦争」とも呼ばれ、それ以降日本の磁器は画期的な飛躍を果たします。まず李三平は磁器に適した鉾石を有田で発見し、李朝のような白色磁器の焼成に日本で初めて成功しました。一方、柿右衛門は長崎で中国人から学んだ技法から赤絵を作り、柿右衛門様式と呼ばれる独特のデザインを確立しました。つまり有田の色絵磁器は、李朝と明の技術の合作とも言えるわけです。その後



写真1 碗皿藍草花散らし(艸窯)

鍋島藩の保護策の下で美しさを極めた色鍋島と呼ばれる磁器が作られました。鍋島藩は製品の管理と技術の流出を厳しく制限したので、磁器の生産は有田・伊万里の商人と鍋島藩によって長期間ほぼ独占状態でした。しかし、1828年有田で起きた大火事によって、多くの磁器職人が有田を離れ日本中に分散したため、各地に磁器の生産が広まったと言われています。

佐賀から長崎にまたがる「肥前皿山地区」には山を挟んでわずか十数キロのエリアに鍋島藩の有田焼(色鍋島)、平戸藩の三川内焼(唐子や透かし彫)、大村藩の波佐見焼(くらわんか茶碗)などの窯元が無数に存在し、お互いに個性を生かしながら発展してきました。

◆窯元めぐり

焼き物を簡単に言えば、1,300℃の信じられないような高温の炎をくぐり抜けて、土から生まれ変わった器です。原料は、陶器の場合は畑や田んぼの土などの粘土ですが、磁器は鉄分を含まないカオリンや石英や長石などの鉱石を砕いて水簸した粘土です。焼成は、窯を1,300～1,400℃の高温にすることで、器の表面を融解させ鉱石の化学構造を変えてガラス化させます。それによって、水を通さない、汚れにくい器ができるわけです。

若い頃から九州・山口各県の焼き物産地を中心に、出張や観光のついでに、一人であるいは連れ合いと窯元巡りをした思い出は忘れることができません。私が器を選ぶときは、良いか悪いかより、好きか嫌いかの直観を大事にしています。収集する器はお茶碗や皿、湯呑、コーヒーカップ等の安価な日常食器が多く、高価で大きい器は少ない。器は手元において毎日使いた

いと思っているため、鑑賞的な美だけでなく、用の美(使い易さ)も重要な要素です。作品に一目ぼれすると、次に作家や職人さんの人柄や作陶に打ち込む姿勢が気になります。器には、作家の注ぎ込んだ時間と「想い」が必ずしみ出てくるものと思っているからです。このような理由で、私は作っている人の顔が想像できない骨董品にはさして興味がわきません。

◆磁器の楽しみ方

1. 模様をみる

江戸時代の色鍋島の器の背景に使われている地紋は、今まで何気なく見ていました。しかし、模様には様々な意味や願いが込められていて、職人さんはどんな「想い」で作ったのか想像するのは楽しいものです。

① 亀甲紋(写真2-①)

読んで字のごとく正六角形で亀の甲羅を文様化している。バランスもよく長寿のシンボルでめでたくて伝統的な吉祥文様(御祝柄)です。平安時代に流行しました。

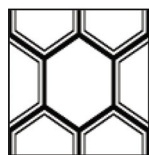
② 青海波(写真2-②)

波が末広がりになることから平和や繁栄を意味します。出産などの慶事にも使われます。江戸(元禄)時代に「墨はじき」による技法も開発され流行しました。

③ 蛸唐草(写真2-③)

中東のアラベスクがルーツと言われ、蔓の繁殖力から繁栄や長寿を意味します。江戸時代の伊万里焼で流行した柄です。作家によって模様や書き方が異なるため種類が多く比較すると面白い。ただし、なぜ蛸と唐草が組み合わせられたのか不明です。

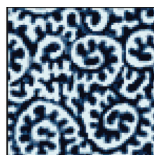
④ 網目紋(写真2-④)



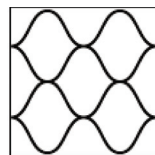
① 亀甲紋



② 青海波



③ 蛸唐草



④ 網目紋

写真2 代表的な地紋の種類

魚を捕る網を文様化したもので、大漁祈願から転じて、福を絡め取る意味があります。また連続することから長寿を意味するので、敬老のお祝いに使われる代表的な柄です。

2. 使ってみる、触ってみる

外国と比べて日本には、茶碗やお椀を手に持ち、そして器に口をつけて料理を味わう習慣があります。私たち日本人は、器の形状や手触り、重さ、口縁の形状等の違いに繊細な感覚を持つ民族だと思います。つまり、鑑賞的な美だけでなく用の美(盛りつけやすい、洗いやすい、しまいやすい、割れにくい、などを満たす細工)も重視されてきました。展覧会入選や〇〇国宝の作品だからと外見だけの評価で購入した器が、使い難かった経験をしました。ロクロの名人は軽くて使い易い器を作るし、酒器の得意な陶芸家は器の口縁の作りが上手い。やっぱり用の美は、手にしてみないとわかりませんね。

3. 買う

有田町では、毎年ゴールデンウィーク中に有田陶器市が開催されます。今年で110回目を迎え、7日間で延べ137万人の人出がありました。有田陶器市の一番の特徴は、窯元から二級品(B級品)や半端物が蔵出しされることと、売り手と買い手の駆け引きで安く値切れる醍醐味があることです。例えば目の肥えた買い手は、器の小さなキズや歪みを交渉の材料にして値切りますが、気がつかない客は売り手の言い値で買うしかありません。昨年見つけた1枚1,000円の美しい豆皿を、今年は店主と粘って交渉し3枚2,000円で購入しました。しかし時間が経つと、もうひと押しすれば5枚3,000円でも買えたかもと欲が出て悔しい思いをしました。

4. 作家と出会う

好きな作家の窯元を訪れて、作家さんの話を聞くのは最も楽しい時間です。私が器の購入で大事にしているのは、作家の人柄や器を通して伝えたい作家の「想い」です。ロクロの技術や絵の上手さも大事ですが、作者の伝えたい「想い」と私の気持ちが一一致したときは、技術を超えて感動します。一期一会のようにして出会っ

た器は、もちろん長く大事に使います。しかし、最近関西方面の古い窯元に出向いてコーヒーカップを1客依頼したら、「注文は10客セットでお願いします」と言われ、いろんな作家がいるものだと驚き落胆しました。私もこのごろは、窯元に行っても同業者と勘違いされることが多くなりました。

◆伝統工芸士を知っていますか？

陶磁器や塗物、織物などの伝統工芸品は、その技術の習得には長い年月が必要とされます。このような高度な技術の保護と後継者育成を目的に、「伝統工芸士認定試験」が実施されています。受験資格に必要な実務経験年数は、12年以上(以前は20年以上でした)でとても長く、試験は実技(作品)と知識に分かれています。現在211品目に約4,700名が認定され、そのうち有田・伊万里地区には磁器の成形と絵付け部門で合計91名の伝統工芸士が活躍されています。まるで日本臨床検査同学院が主催する認定臨床検査士とソックリで驚きました。どの分野でもしっかりした技術を持った人が適切に評価される社会になることは大切なことだと感じました。そしてまた、腕を磨かないと生き残るのは大変なことのようです。

◆この作品がすごい

大きな房を持つ赤と青の紐が重なり合う絵柄を手描きしたカップとソーサーです(写真3)。オリジナルは鍋島藩窯(1680年代)の色絵組紐紋皿(七寸皿)で、絵柄をアレンジしています。見所は、描くのが困難なカップの側面の房と、房や紐の線が肥厚や迷いのない美しい線で描かれていることです。作者は、無名の絵師が描いた江戸時代の色鍋島を理想としていて、この作品の高度な技術・精神力・集中力からその「想い」が伝わってきます。

白磁の上品で美しいティーカップです(写真4)。器の口縁は柔らかいカーブで飲みやすく工夫されています。最も特筆すべきはその薄さと軽さ(カップ66g)を可能にしたロクロ技術です。



写真3 色絵房紐珈琲碗(龍仙窯)



写真4 紅茶碗(嘉久房窯)

200年前の昔に、オーストリア皇室から注文された極薄の磁器製ワイングラスを作るすご腕のロクロの技術を持った先祖の話を聞いて驚きました。私は作者の職人氣質と謙虚で素敵な人柄が、このカップに滲み出ているなと思って大事に使っています。

◆ 艸窯に魅せられて

有田・伊万里には、ロクロや絵付けの厳しい修業を積んだ名人と呼ばれる人がいます。しかしそんな名人の多い有田で、全く異なる手法で挑戦している窯元が艸窯です。今から20年以上前に初めて作品を拝見した時、今までに出会



写真5 藍の草花模様(艸窯)



写真6 碗 変形皿(艸窯)

ったことがない器で、正直言ってそれがどうやって作られたのかも想像できませんでした。特徴は器や皿の表と裏が同じ模様で一体感があり、繊細ではないけど力強く、磁器なのに温かみも感じる不思議な印象を受け、すぐにその魅力に取りつかれました(写真5, 6)。それは、中国・宋の時代から伝わる「練り上げ(練り込み)」と言われる幻の技法で、当時は有田では誰も作る人が居ませんでした。作り方を簡単に説明すると、

- ① 白磁用の粘土に顔料を練りこみ、いろいろな色の粘土を作る。
- ② 色の異なる粘土を板状に積み重ねたり、巻いたり、または金太郎飴みたいな文様をつくる。
- ③ 模様の断面を一定の厚さでカットし、さら

にそれを組み合わせて、粘土板を作成する。

④ 粘土板を器の型に被せて成形する。

⑤ 乾燥させて釉薬を掛け 1,300℃ で焼成して完成させる。

この手法は本来陶器の技法ですが、艸窯ではより難易度の高い磁器による「彩磁練り上げ」で作品を作っています。窯元の草場勇次さんは、「県の窯業試験場の技官だった父親の影響で、測量技師から焼き物屋になりました。有田にない面白いものを作るために、誰もやったことがない方法に挑戦し、自分たちが良いと思う好きな作品を表現したかった。この手法は、ロクロ成形と異なり作るのに手間がかかるため大量生産に不向きです。作る過程でもまた焼成中にも割れやすく、歩留まりも悪かった。焼成温度の高い磁器では本当に失敗の連続でした。しかし、自分には一つのことを突き詰めてやるしかない信じ、死ぬほど本を読み、朝も晩も無いくらいに働きましたね。」と笑いながら話してくださいました。もし指導者も手本も資料さえも無いとき、私だったらどの道を選択するだろうかと考えさせられました。

草場さんは、2011年に念願だった超難関と言われる日本陶芸展(伝統部門)に入選することができたそうです。また艸窯では、自分たちの目の届く範囲で作品を販売したいという願いから、窯元のショールームや個展で販売するスタイルをとっています。艸窯の器からほんのり温かみを感じるのには、作家と客の距離が近いために、器に込めた作家の「想い」が伝わりやすいから

ではと私は考えています。

◆艸窯ワークショップに参加して

艸窯では、気に入った練り込み器を購入できるだけでなく、自分で器を作るワークショップを定期的に開催しています(要予約)。私も体験しましたが、とっても楽しかったです。草場さんに伺うと、作り始めると大人の方が熱中するそうです。ワークショップの様子を簡単に紹介します。

1) テーブルの上のまな板の上に板状の粘土と、赤、青、緑、ピンクなどの粘土塊が予め準備されています(写真7-①)。まず、着色された粘土を板状(層状)など好みに組み合わせて模様を作ります。私は、蛸唐草をイメージした渦巻模様と格子のチェック柄を作ることにしました。渦巻き模様は、異なる色の2枚の薄い粘土板を巻いてロールケーキ状態にして、同じ厚さにカットした断面を組み合わせます。格子模様は粘土を交互に煉瓦のように重ねて同じように作成します(作り方は教わりました)。組み合わせた粘土の立体的な構造をイメージしながら、好きな模様を作るワクワク感はまさに大人向きのおもしろさだと思いました。

2) 作った模様の断面をカットし、粘土板に組み込みます(写真7-②)。私は、2時間程度で粘土板の中に収めることができました。私たちの作業はここまでです。

3) 次は草場さんの出番です。まずまな板の上でガーゼに包み、板で平らに叩きます。粘土と



① 青、赤、黄の粘土塊



② 模様を入れた粘土板

写真7 艸窯ワークショップにて



③ ロクロを使って成形



④ 完成品

写真7 艸窯ワークショップにて

粘土の隙間の空気を抜いてぴったり密着させるため、焼成時のひび割れを防ぎます。

4) 出来上がりの形状は、飯碗、マグカップ、フリーカップから選ぶことができます。先ほどの陶板をロクロを使って石膏型に巻き付け、繋ぎ合せながら器の形を整えていきます(写真7-③)。最後に器の底をつけて、必要に応じて取手をつけます。

5) 成形終了後は、1ヵ月ほどかけてゆっくり乾燥させ、最後に釉薬を掛けて焼成します。私は、粘土の隙間から水が漏れないか心配でしたが、焼成すると釉薬が表面を覆うので心配ないそうです。

出来上がった作品(写真7-④)は不細工ですが世界に一つだけの私の作品です。焼き物を「作る魅力」と、そのあとの「使う魅力」に重なる楽しい経験でした。また素人でも楽しく簡単に器が作れるように、粘土の選択も含めて艸窯が今まで試行錯誤したノウハウがさりげなく活かされています。焼き物は面白いよとささやく艸窯のご主人の声が聞こえてきそうです。

◆終わりに

今回紹介した艸窯の草場さんご夫妻(写真8)は、美しいものを作ってお客様に喜んでほしいという「想い」を強く持っていました。私は、そのような技術を超えた「想い」と内面の人間性の美しさから、きっと美しい器は生まれるのだらうと思いました。



写真8 艸窯ご夫妻と(中央が筆者)

また、草場さんからお話を伺ったとき、誰もやったことが無い技術や新しい発見はきっとこのような失敗の繰り返しから生まれるのだと思い知らされました。そして自分にはこれしかないという覚悟を持ち、誰もやらないことに夢中で挑戦しているうちに、気が付けば誰もついて来られない高さまで来ていたのだらうと思いました。それに対して、最近の若者は簡単で成功しやすいものはやりますが、成功する可能性が低いものや、難しいものにはなかなか手を出そうとしません。また、失敗を極度に嫌う傾向が強いと感じます。失敗を恐れて手を出さなかったり、諦めた時が本当の失敗なののだらうと思いました。今後も勉強会を通じて若手を厳しく育てていきたいと思っています。